

## 表面に部分荷重を受ける円孔を有する半無限体の応力解析について

室蘭工業大学 正員 ○衣岡 健一  
 北海道大学 正員 能町 純雄  
 土質工学研究所 正員 杉田 修一

## 1. まえがき

円孔を有する半無限体が円孔付近に部分荷重を受けるときの応力分布は、円孔の近くで特徴がある。円孔を有する半無限体の問題は Blenckann<sup>1)</sup> によって取扱われているが、Blenckann はこのなかで軸対称内圧が部分的に円孔上面端に作用する場合の解析を行はる、これと同種の次元問題として Hetényi<sup>2)</sup> が行なった Quarter-Plane の解の結果との比較を行はっている。しかし Blenckann は非軸対称問題の解析は行はないし、軸対称問題でも解の例は僅かである。著者らはこれを非軸対称問題にまで拡張し、軸対称問題に対しても種々の大きさ、位置に内圧を受ける場合の解析を行はる、無限体中の円孔に内圧が作用する場合や Hetényi<sup>2)</sup> の結果との比較を行はる発表した<sup>3)</sup>。本論ではこの解を用い、半無限体表面の円孔付近に部分荷重を作らせた場合の解析を行はる、先に解析した円孔面に内圧が作用する場合や Hetényi<sup>2)</sup> の結果との比較を行はる。

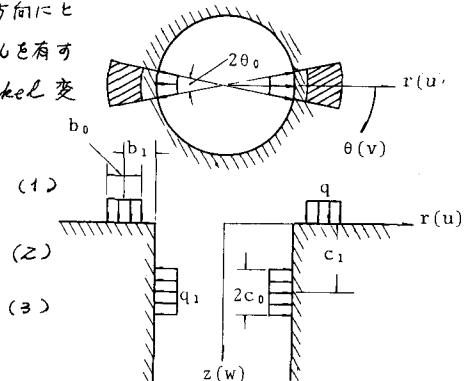
## 2. 円孔を有する半無限体の Fourier-Hankel 変換による解

図-1 に示すように、 $r$ ,  $\theta$ ,  $z$  座標を半径、円周、円孔軸方向にとり、それらの方向の変位を、 $u$ ,  $v$ ,  $w$  とする。このとき円孔を有する半無限体の非軸対称問題にまで拡張した解は、Fourier-Hankel 変換を用ひると、次のようにえられる。

$$U = \frac{1}{\pi} \sum_m C_m (A_{mrz} + B_{mrz}) \cos m\theta,$$

$$V = \frac{1}{\pi} \sum_m (A_{mrz} - B_{mrz}) \sin m\theta,$$

$$W = \frac{1}{\pi} \sum_m C_m W_{mrz} \cos m\theta,$$



ただし、上式中  $A_{mrz}$ ,  $B_{mrz}$ ,  $W_{mrz}$  は次のようになる。

$$A_{mrz} = \frac{2}{\pi} \int_0^\infty \sin mz \left[ \frac{1}{2\mu m} X_{mp}(mr) \{ \alpha_{mn} + \beta_{mn} - 4\mu \frac{m+1}{a} A_{mn} - \mu n D_{mn} \} - \frac{\mu+\lambda}{2(2\mu+\lambda)m} w_{mp}(mr) \{ \frac{1}{2\mu} \beta_{mn} + \frac{m+1}{a} A_{mn} - \frac{m-1}{a} B_{mn} - n D_{mn} \} \right] dm$$

$$+ \int_0^\infty \frac{2H_{m-1}(sr)}{B_m(sr)} [Q(sz) E_{m5}^a - \frac{\mu+\lambda}{2(2\mu+\lambda)} P(sz) \{ \frac{1}{2\mu s} Y_{m5} + E_{m5}^a - E_{m5}^b \}] ds, + \frac{2m}{r} \left( \frac{a}{r} \right)^{\frac{m-a}{E_{m5}}} \quad (4)$$

$$B_{mrz} = \frac{2}{\pi} \int_0^\infty \sin mz \left[ \frac{1}{2\mu m} X_{ms}(mr) \{ -\alpha_{mn} + \beta_{mn} - 4\mu \frac{m-1}{a} B_{mn} - \mu n D_{mn} \} - \frac{\mu+\lambda}{2(2\mu+\lambda)m} w_{ms}(mr) \{ \frac{1}{2\mu} \beta_{mn} + \frac{m+1}{a} A_{mn} - \frac{m-1}{a} B_{mn} - n D_{mn} \} \right] dm + \int_0^\infty \frac{2H_{m-1}(sr)}{B_m(sr)} [Q(sr) E_{m5}^b + \frac{\mu+\lambda}{2(2\mu+\lambda)} P(sr) \{ \frac{1}{2\mu s} Y_{m5} + E_{m5}^a - E_{m5}^b \}] ds, \quad (5)$$

$$W_{mrz} = \frac{2}{\pi} \int_0^\infty \cos mz \left[ G_m(mr) D_{mn} - \frac{\mu+\lambda}{2\mu(2\mu+\lambda)m} F_m(mr) \{ \beta_{mn} + 4\mu \left( \frac{m+1}{a} A_{mn} - \frac{m-1}{a} B_{mn} - n D_{mn} \right) \} \right] dm - \int_0^\infty \frac{2H_m(sr)}{B_m(sr)} [\phi(sr) \{ \frac{1}{2\mu s} Y_{m5} + E_{m5}^a - E_{m5}^b \} - \frac{\mu+\lambda}{2\mu+\lambda} \{ \phi(sr) - \psi(sr) \} \{ \frac{1}{2\mu s} Y_{m5} + E_{m5}^a - E_{m5}^b \}] ds, \quad (6)$$

ここで、 $C_m = 1$ ,  $m=1, 2, \dots$ ,  $c_0 = 1/z$ ,  $a$  は円孔の半径であり、 $\mu$ ,  $\lambda$  は Lame の弾性定数である。また式中の  $\alpha_{mn}$ ,  $\beta_{mn}$ ,  $\dots$  は円孔面および表面の変位や応力の Fourier 変換または Hankel 変換でえられる積分定数で、次のようにおこっている

$$\alpha_{mn} = \int_0^{2\pi} \int_0^{\infty} T_{r\theta} r = a \sin m\theta \sin n\theta d\theta dz \quad (7), \quad \beta_{mn} = \int_0^{2\pi} \int_0^{\infty} T_r r = a \cos m\theta \sin n\theta d\theta dz \quad (8).$$

$$A_{mn} = \int_0^{\infty} A_{mrz} r = a \sin m\theta d\theta \quad (9), \quad B_{mn} = \int_0^{\infty} B_{mrz} r = a \sin n\theta d\theta \quad (10)$$

$$D_{mn} = \int_0^{2\pi} \int_0^{\infty} W r = a \cos m\theta \cos n\theta d\theta dz \quad (11), \quad Y_{m\bar{z}} = \int_0^{2\pi} \int_a^{\infty} (\bar{r}_z)_{z=0} r H_m(3r) \cos m\theta dr d\theta \quad (12)$$

$$E_m^a = \int_a^{\infty} A_{mrz} r = r H_{m+1}(3r) dr \quad (13), \quad E_m^b = \int_a^{\infty} B_{mrz} r = r H_{m-1}(3r) dr \quad (14)$$

$$A_{mrz} = \frac{1}{2} \int_0^{2\pi} \left\{ U \cos m\theta + V \sin m\theta \right\} d\theta \quad (15), \quad B_{mrz} = \frac{1}{2} \int_0^{2\pi} \left\{ U \cos m\theta - V \sin m\theta \right\} d\theta \quad (16)$$

式(1)に式中の関数は、

$$J_j(\xi r) = J_j(\xi r) Y_m(3a) - J_m(3a) Y_j(\xi r), \quad j=m+1, m, m-1, \quad B_m(3a) = \{J_m(3a)\}^2 + \{Y_m(3a)\}^2,$$

$$G_m(nr) = K_m(nr)/K_m(3a), \quad X_{mp}(nr) = -K_{m+1}(nr)/K_m(3a), \quad X_{ms}(nr) = -K_{m-1}(nr)/K_m(3a)$$

$$F_m(nr) = nr X_{mp}(nr) - ma G_m(nr) X_{mp}(ma), \quad W_{mp}(nr) = nr G_m(nr) - ma X_{mp}(nr) X_{ms}(ma),$$

$$W_{ms}(nr) = nr G_m(nr) - ma X_{ms}(nr) X_{mp}(ma), \quad Q(\xi z) = e^{-\xi z}, \quad P(\xi z) = 4\xi z e^{-\xi z},$$

$$J_j(\xi r), \quad Y_j(\xi r) \text{ は第1種および第2種の Bessel 関数}, \quad K_j(nr) \text{ は第2種の 变形 Bessel 関数である}。$$

各応力成分は、式(1)～(6)から Hooke の法則を用いて求められる。

### 3. 境界条件式

式(7)～(14)で与えられる係数は、各境界の境界条件を満足させようにはあらはうが、また式(9), (10)に示すように、この式は、式(4), (5)を満足せしむればはう。

また各境界では、せん断応力は作用せず、直応力のみが作用するものとすれば、このときの境界条件は、

$$i) \quad T_{r\theta} = 0 \quad \text{for } r = a \quad \therefore \alpha_{mn} = 0 \quad (17), \quad ii) \quad T_{rz} = 0 \quad \text{for } r = a \quad (18)$$

$$iii) \quad \bar{U}_r = P_1(\theta, z) \quad \text{for } r = a \quad \therefore \beta_{mn} = \int_0^{2\pi} \int_0^{\infty} P_1(\theta, z) \cos m\theta \sin n\theta d\theta dz \quad (19)$$

$$iv) \quad \bar{U}_z = P_2(r, \theta) \quad \text{for } z = 0 \quad \therefore Y_{m\bar{z}} = \int_0^{2\pi} \int_a^{\infty} P_2(r, \theta) r H_m(3r) \cos m\theta dr d\theta \quad (20)$$

$$v) \quad T_{rz} = 0 \quad \text{for } z = 0 \quad (21), \quad vi) \quad T_{zo} = 0 \quad \text{for } z = 0 \quad (22)$$

したがって  $P_1(\theta, z)$ ,  $P_2(r, \theta)$  は  $r = a$  および  $z = 0$  に作用する外力である。以上の条件より、未知係数は  $A_{mn}$ ,  $B_{mn}$ ,  $D_{mn}$ ,  $E_m^a$ ,  $E_m^b$  となり、これらは式(4), (10), (18), (21), (22)から求めることが可能だ。これらの式は

$$\begin{aligned} A_{mn} &= \frac{1}{2\mu+\lambda} X_{mp}(ma) \left\{ \beta_{mn} + 4\mu \frac{m+1}{a} A_{mn} - \mu D_{mn} \right\} - \frac{\mu+\lambda}{2(2\mu+\lambda)n} W_{mp}(ma) \left\{ \frac{1}{2a} \beta_{mn} \right. \\ &\quad \left. + \frac{m+1}{a} A_{mn} - \frac{m-1}{a} B_{mn} - \mu D_{mn} \right\} + \int_0^{\infty} \frac{\xi H_{m+1}(3a)}{B_m(3a)} \left[ \frac{n}{n^2+5^2} E_m^a - \frac{\mu+\lambda}{2\mu(2\mu+\lambda)} \frac{n^5}{(n^2+5^2)^2} \right] \{ Y_{m\bar{z}} \} \\ &\quad + 2\mu \xi (E_m^a - E_{m\bar{z}}) \} ] d\xi + \frac{2m}{\pi ka} E_m^a \end{aligned} \quad (23)$$

$$\begin{aligned} B_{mn} &= \frac{1}{2\mu+\lambda} X_{ms}(ma) \left\{ \beta_{mn} - 4\mu \frac{m-1}{a} B_{mn} - \mu D_{mn} \right\} - \frac{\mu+\lambda}{2(2\mu+\lambda)n} W_{ms}(ma) \left\{ \frac{1}{2a} \beta_{mn} \right. \\ &\quad \left. + \frac{m+1}{a} A_{mn} - \frac{m-1}{a} B_{mn} - \mu D_{mn} \right\} + \int_0^{\infty} \frac{\xi H_{m-1}(3a)}{B_m(3a)} \left[ \frac{n}{n^2+5^2} E_m^b + \frac{\mu+\lambda}{2\mu(2\mu+\lambda)} \frac{n^5}{(n^2+5^2)^2} \right] \{ Y_{m\bar{z}} \} \\ &\quad + 2\mu \xi (E_m^b - E_{m\bar{z}}) \} ] d\xi \end{aligned} \quad (24)$$

$$\begin{aligned} \{ X_{mp}(ma) + \frac{m}{ma} \} \beta_{mn} + 2\mu \left\{ X_{mp}(ma) \frac{m+1}{a} A_{mn} - X_{ms}(ma) \frac{m-1}{a} B_{mn} \right\} - \frac{\mu+\lambda}{2\mu+\lambda} W_{mp}(ma) \{ \beta_{mn} \} \\ + 2\mu \left( \frac{m+1}{a} A_{mn} - \frac{m-1}{a} B_{mn} - \mu D_{mn} \right) \} + \int_0^{\infty} \frac{\xi H_{m+1}(3a)}{B_m(3a)} \left[ \frac{\xi}{n^2+5^2} Y_{m\bar{z}} - \frac{2(\mu+\lambda)}{2\mu+\lambda} \frac{n^5}{(n^2+5^2)^2} \right] \{ Y_{m\bar{z}} \} \end{aligned}$$

$$+2\mu\zeta(E_{m3}^a - E_{m3}^b)\} \] d $\xi$  (25)$$

$$\frac{2}{\pi} \int_0^\infty H_{m+1}(5a) \left[ -\frac{n}{n+5^2} \{ \beta_{mn} + 2\mu \frac{m+1}{a} A_{mn} \} + \frac{2(\mu+\lambda)}{2\mu+\lambda} \frac{\mu\zeta^2}{(n+5^2)^2} \{ \beta_{mn} + 2\mu \left( \frac{m+1}{a} A_{mn} - \frac{m-1}{a} B_{mn} \right. \right. \\ \left. \left. - m D_{mn} \right) \} \right] dn + \frac{\mu}{2\mu+\lambda} \gamma_{m3} - \mu\zeta(E_{m3}^a + E_{m3}^b) - \frac{2\mu(\mu+\lambda)}{2\mu+\lambda} \zeta(E_{m3}^a - E_{m3}^b) = 0 \quad (26)$$

$$\frac{2}{\pi} \int_0^\infty H_{m-1}(5a) \left[ \frac{n}{n+5^2} \{ \beta_{mn} - 2\mu \frac{m-1}{a} B_{mn} \} - \frac{2(\mu+\lambda)}{2\mu+\lambda} \frac{\mu\zeta^2}{(n+5^2)^2} \{ \beta_{mn} + 2\mu \left( \frac{m+1}{a} A_{mn} - \frac{m-1}{a} B_{mn} \right. \right. \\ \left. \left. - m D_{mn} \right) \} \right] dn - \frac{\mu}{2\mu+\lambda} \gamma_{m3} - \mu\zeta(E_{m3}^a + E_{m3}^b) + \frac{2\mu(\mu+\lambda)}{2\mu+\lambda} \zeta(E_{m3}^a - E_{m3}^b) = 0 \quad (27)$$

となる。

#### 4. 数値解析例

数値計算は、 $\mu = \lambda = 0.4E$  ( $E$ : 弾性係数、ポアソン比 0.25) で、半無限体表面に部分荷重を作用させた場合、可逆荷重  $P_r(\alpha, z) = 0$ としたものである。計算結果の一部を図に示すが、いずれも軸対称の場合で荷重分布  $b_0/a = 0.2, 0.4$  で荷重位置  $b_0/a = b_0/2\pi$  のものである。また各式中の積分は数值積分を行なった、また  $10\pi/b_0$  まで 92 点と Gaussian の積分法により積分した。

図-2 は、荷重分布巾  $b_0/a = 0.2, 0.4$  のものに対して、半無限体表面  $z=0$  における  $r$  方向の分布を示したものである。図中の一実線は Quarter-Plane としての Hetényi の結果を示したものである。横軸は荷重分布巾を基準として示してあるが、 $(r-a)/b_0 = 1.0$  で不連続になり  $(r-a) < b_0$  では、 $b_0/a = 0.4$  のものが大きくなる  $(r-a) > b_0$  では、 $b_0/a = 0.2$  のものが大きな値を示している。応力の変化はどちらも割合よりやかである。この場合 2 次元解析結果と比較すると  $b_0/a = 0.4, 0.2$  とも  $r$  の全域にわたりかなり差がある。 $b_0/a = 0.2$  のものが Hetényi の値に近くはないことからも明らかのように、 $b_0$  を小さくすれば 2 次元解析に近くなる。図-3 は円孔面上端部に軸対称内圧を作成されたときの結果で、すでに発表したものであるが、この

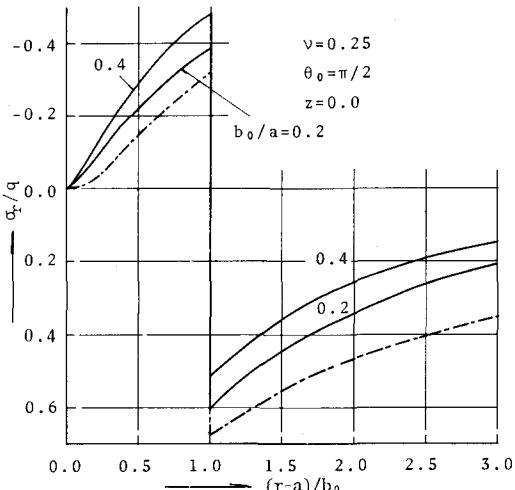


図-2 分布巾を変化させたときの半無限体表面 ( $z=0$ ) の  $r$  方向の分布

ときの円孔面の  $\sigma_r$  の  $r$  方向の分布を示したものである。本論の場合の図-2 に相当するが、と考えられるので、参考のためにここに示す。やはり荷重分布巾を変化させたものであるが、このときは  $r < 2c_0$  では荷重分布巾の変化に対して  $\sigma_r$  の値はそれほど大きく変化せず、ほぼ一定で Hetényi の値とも近い値をとっている。また  $r > 2c_0$  では荷重分布巾に対してかなり相違が示され、荷重分布巾の大きさはもうほど  $\sigma_r$  の増加に対して大きく減少している。従ってこの場合も  $r > 2c_0$  の範囲に対しては  $c_0$  の大きさほど Hetényi の値とは異なる。図-2 と図-3 とを比較すると、それそれ応力分布の形状は似ているが、数値的にはかなり異なる。これは図-2 の場合荷重の全量としては図-3 のものに比べて大きいためとも考えられる。半無限体表面に載荷する場合の方が 2 次元として影響が大きいことを示している。

図-4 にはこの各断面の  $\sigma_r$  の  $r$  方向の変化を  $b_0/a = 0.4$  のものについて示したものである。 $r=0$  では荷重強度に一致することは当然であり、 $r$  の増加とともに減少するが  $r/a = 0.5$  では円孔面  $r=a$  で  $\sigma_r > \sigma_0$  となる。従って円孔面での  $\sigma_r$  の減少はゆるやかで  $r/a = 4.0$  でも  $\sigma_r \approx 0.3\sigma_0$  となる。

図-5 は同様に  $\sigma_t$  の各断面の  $r$  方向の変化を  $b_0/a = 0.4$  のものについて示したものであるが、変化の

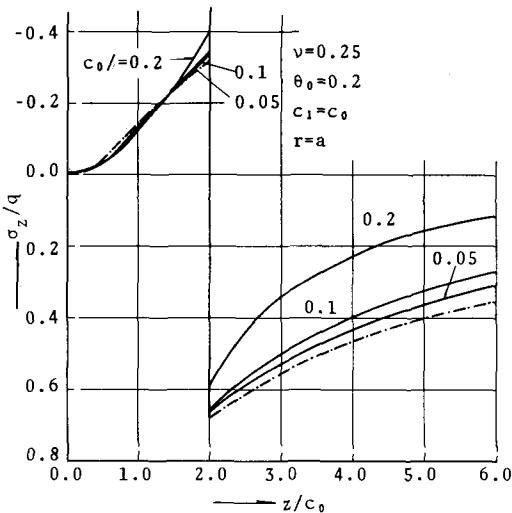


図-3 円孔面上端部に軸対称内圧が作用すると  
きの円孔面の $\bar{\sigma}_z$ の分布

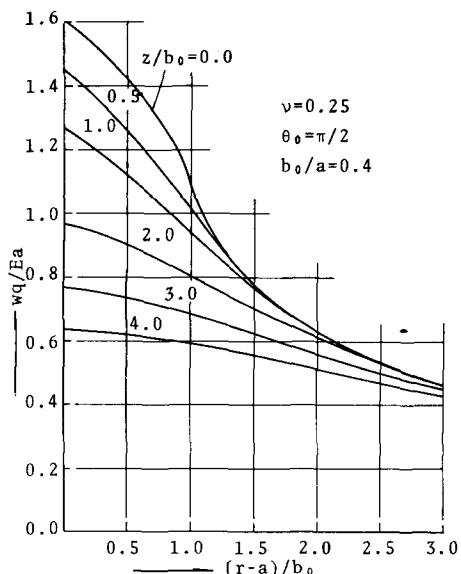


図-5 各断面の $wq$ の $r$ 方向の変化

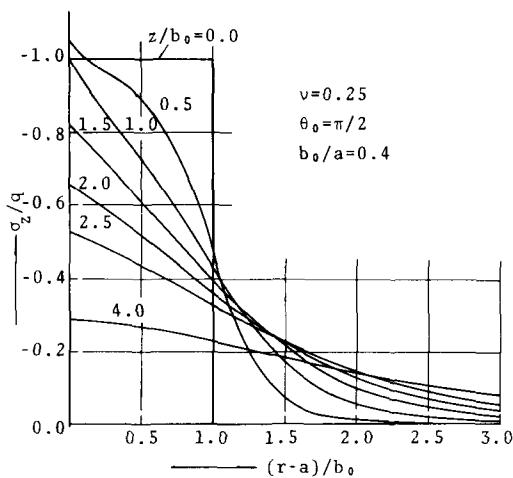


図-4 各断面の $\bar{\sigma}_z$ の $r$ 方向の分布

傾向は表面付近を除けば $\bar{\sigma}_z$ の分布にかなり高く一致している。図-6には $\bar{\sigma}_r$ の分布を示したが、 $\bar{\sigma}_r$ は $z=0$ 附近ではかなり小さく $z$ が大きくなるに従って急速に減少していく。 $r=a$ では $\bar{\sigma}_r=0$ であるから $r=a$ への近くで減少の程度は大きく、 $r$ の大きさとともに $z=0$ でやや大きな応力を示しているが $z=0.25$ で $\bar{\sigma}_{r\max} \approx 0.15$ 位である。

以上、円孔を有する半無限体の表面に部分荷重が作用する場合の解析を行ない、2次元問題としての結果および円孔面上部分荷重をうける場合の結果と若干比較し、それぞれ特徴のあることを示した。

なお以上の計算は主として北海道大学大型計算機センターの FACOM 230-75によって行なった。  
※ 参考文献

- 1) Blenckamp, K. A. and J. C. Wilholt; J. App. Mech., Dec. 1962, pp 647-650 2) Hetenyi, M.: J. App. Mech., June 1960, pp 289-296 3) 松岡・角野: 第26回応力連合講演論文集, 1976. 11, pp 327-328

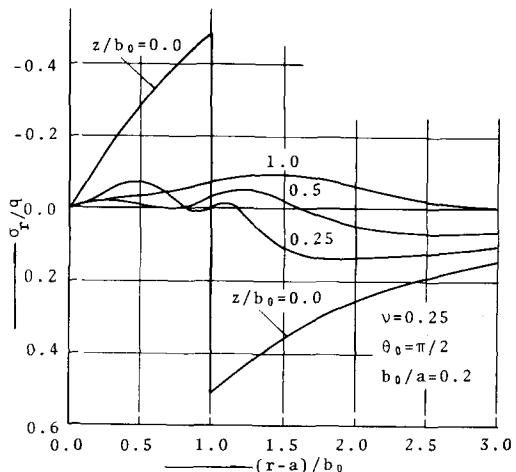


図-6 各断面の $\bar{\sigma}_r$ の $r$ 方向の分布